HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	セデック語の方言比較から浮き彫りになる化石接中辞
Author(s)	落合, いずみ
Citation	アイヌ・先住民研究, 2, 1-29
Issue Date	2022-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/Jais.2.001
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84496
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_2_Ochiai.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ・先住民研究　第２号　2022　　p.001–029　　ISSN 2436-1763
Aynu teetawanoankur kanpinuye (2) 2022　p.001–029　　DOI 10.14943/Jais.2.001

【論文】

セデック語の方言比較から浮き彫りになる化石接中辞**

落　合　いずみ*

要　旨

セデック語（オーストロネシア祖語アタヤル語群）の二つの方言、パラン方言とトゥルク方言の同源語を比較し、どちらか一方に化石接中辞が付加されている形式を調べた。化石接中辞には、語根の語頭子音直後に挿入されるものと、最終音節の母音の直後に挿入されるものがあり、それぞれを化石前方接中辞、化石後方接中辞と呼ぶ。化石前方接中辞はオーストロネシア諸語に広くみられ、歴史的重複語に挿入されることが多いという特徴があるが、その機能はよくわからない。ただアタヤル語群の場合は歴史的重複語以外に化石前方接中辞が挿入される例が多い。一方、化石後方接中辞はオーストロネシア諸語の中でもアタヤル語群(アタヤル語とセデック語)にのみ見られる。こちらの機能もよくわからないが、化石後方接中辞は化石前方接中辞よりも大きな音韻的変化をもたらし、語根の原形をほとんどとどめないため、隠語を造る働きがあったのではないかと考えられる。本稿はアタヤル語群祖語における化石前方接中辞を*<əl>、*<ən>、*<əR>と再建した。また、アタヤル語群祖語における化石後方接中辞は*<ra>と再建される。

キーワード：セデック語、アタヤル語、隠語、化石接辞、再建

１．化石接中辞とは

セデック語はアタヤル語群に属する言語である。小川・浅井（1935: 559）によるとセデック語はパラン方言とトゥルク方言に大別される。アタヤル語群にはセデック語とアタヤル語の二つの言語が含まれる。アタヤル語群は台湾先住民族によって話される言語である。台湾先住民族の言語は20 数種類あるとされるが、いずれもオーストロネシア語族に属する言語である。

Li（1985）では、アタヤル語群が他のオーストロネシア諸語には見られない特殊な接辞を持つことを述べている。これら特殊な接辞は接中辞か接尾辞かのいずれかであり、これらが付加する動機

* 帯広畜産大学人間科学研究部門

** 本稿は筆者による研究発表Inconspicuous infixation in Seediq（The 28th Meeting of the Southeast Asian Linguistic Society, 19th May 2018, Wenzao Ursuline University, Kaohsiung）に基づく。本発表において助言をくださった方々に感謝する。本稿に助言をくださった査読者の方々にも感謝する。ただし、本稿の不備は筆者の責任である。

やこれらの接辞自体の機能は不明であるとし、ただこれら接辞をもつことにより、アタヤル語群の語彙は他のオーストロネシア諸語の語彙から逸脱することが多いと述べている。落合（2020）はこれら接辞を化石接辞と名付け、それぞれ化石接中辞、化石接尾辞と称した。

化石接中辞に関して、落合（2021）は Li（1985）に加え Li and Tuchida（2009）におけるアタヤル語群の化石接中辞の挿入位置を検討し、挿入位置が、前方、中央、後方の三か所あることを述べ、それぞれを化石前方接中辞、化石中央接中辞、化石後方接中辞と名付け細分類した[1]。アタヤル語群における典型的な語構造は CVCVC の二音節である。化石前方接中辞は <VC> の型を持ち、語根・語基の語頭子音の直後に挿入されるため C<VC>VCVC の語を得る。化石中央接中辞も <VC> の型を持つが、これは語根・語基の最終音節のオンセットの直後に挿入される。そのため CVC<VC>VC の語を得る。それに対し、化石後方接中辞は <CV> の型を持ち、最終音節の母音の直後に挿入される。そのため、CVCV<CV>C の語を得る。これら三種類の化石中辞が挿入された形式を、アタヤル語とセデック語の「女」、「楠」、「顔」の同源語の例とともに表 1 にまとめる。

表 1 では、アタヤル語とセデック語ともに二つの方言からの例を挙げる。アタヤル語は第一行がスコレック方言、第二行がツオレ方言の形式である。セデック語は第一行がパラン方言、第二行がトゥルク方言である。それぞれの方言において、化石接中辞が挿入された形式を持つ場合と挿入されない形式を持つ場合とで異なりが見られる。化石接中辞が挿入された形式は太字で示した。アタヤル語とセデック語のそれぞれにおいて、二つの方言をもとに第三行にアタヤル祖語とセデック祖語の形式を再建した。さらに、アタヤル祖語とセデック祖語の形式を基に、右列にアタヤル語群祖語を再建した。「楠」と「顔」はオーストロネシア祖語に遡るため、Blust and Trussel（2010）にあるオーストロネシア祖語の形式も示した。

アタヤル語またはセデック語の二つの方言の形式のどちらにも化石接中辞が挿入されている場合がある（アタヤル語の「女」、「楠」、「顔」とセデック語の「顔」）。この場合、二つの方言の両方で化石接中辞が挿入されている言語では、その祖語において、化石接中辞を挿入した形式が再建されうる。「顔」はアタヤル祖語とセデック祖語ともに化石接中辞が含まれているため、アタヤル語群祖語でも化石接中辞が挿入された形式が再建されうるが（形式は *daqi<ra>s となる）、表 1 では「女」と「楠」と同様に化石接中辞の挿入されない形式を示した。

1　Li and Tsuchida（2009: 355）は、本稿で化石中央接中辞と呼ぶものと、化石後方接中辞と呼ぶものに相当するアタヤル語からの例において、化石中央接中辞は語基の最終子音の直前、化石後方接中辞は最終母音の直前に挿入されると述べている。本稿では化石前方接中辞が語基の初頭子音の直後に挿入されると説明されるのと同様に、一貫してある分節音の「直後」に挿入されるという説明を用いる。

表１　アタヤル語群における化石接中辞の類型[2]

	アタヤル語	セデック語	アタヤル語群祖語
化石前	***k<ən>ayril***（スコレック方言）	*qedin*（パラン方言）	*kaydil「女」
方接中	***k<an>ayrin***（ツオレ方言）	***q<ər>idil***（トゥルク方言）	
辞	*k<ən>ayril（アタヤル祖語）	*qaydil（セデック祖語）	
化石中	***rək<ən>us***（スコレック方言）	*cakus*（パラン方言）	*dakus, *cakus「楠」
央接中	***rak<in>us***（ツオレ方言）	*sakus*（トゥルク方言）	（オーストロネシア祖語
辞	*rak<in>us（アタヤル祖語）	*cakus（セデック祖語）	*dakəS）
化石後	***rəqi<ya>s***（スコレック方言）	***duqe<ra>s***（パラン方言）	*daqis「顔」
方接中	***ra?i<ya>s***（ツオレ方言）	***dəqə<ra>s***（トゥルク方言）	（オーストロネシア祖語
辞	*raqi<ra>s（アタヤル祖語）	*daqə<ra>s（セデック祖語）	*daqiS）

以下、アタヤル語とセデック語の「女」、「楠」、「顔」について説明を加える。

１．１　「女」―化石前方接中辞

「女」についてアタヤル語スコレック方言の形式は小川（1931: 67）から引用した。アタヤル語スコレック方言の「女」については小川（1931: 67）では語末子音が *r* であったが、Egerod（1980: 291）に挙げられている同一語の形式 *kəneril* では語末子音が *l* である（次末音節における母音は小川（1931）の表記では二重母音 *ay* であるが、それが *e* に変化した）。セデック語トゥルク方言の同源語でも語末子音が *l* であることから、小川の表記を *l* に直した。本稿がこの形式に化石前方接中辞として *<ən>* が含まれると特定した。アタヤル語ツオレ方言の形式は原住民族委員會（2013）から引用した。これも本稿が、化石前方接中辞 *<an>* が含まれると特定した。アタヤル語ツオレ方言の形式では語末の *l* が *n* に変化している。

これら二つの方言における形式から再建されるアタヤル祖語の化石前方接中辞の形式は *<ən> である。Huang（2018: 273）に言及されているように、アタヤル語ツオレ方言では前次末音節（次々末音節）の *ə* が *a* で現れる傾向があるため、*<ən>* から *<an>* に変わったと考えられるためである。アタヤル祖語は *k<ən>ayril と再建される。

アタヤル語の二つの方言の「女」の形式において、化石前方接中辞が含まれていると判断する根拠となったのが、セデック語パラン方言の同源形式 *qedin* である。これには化石前方接中辞の挿入が見られない。ちなみに、セデック語パラン方言の形式では、アタヤル語ツオレ方言の形式と同様に、語末の *l* が *n* に変化した[3]。本稿はセデック語トゥルク方言において、この形式に化石前方接中辞として *<ən>* が含まれると特定した（２節参照）。ちなみに、セデック語トゥルク方言において

2　各形式の出典は本文中で言及するが、セデック語パラン方言については筆者のフィールドノートからである。

3　本稿におけるセデック語トゥルク方言の形式は、文献の記述が記されていない場合Rakaw他（2006: 608）から引用したものである。

語中の *d は直後の母音 *i により口蓋化を受けて ɟ に変わっている。この語について、セデック祖語の形式は Ochiai（2018: 293）により *qaydil と再建されている。前次末音節の母音を二重母音 *ay* で再建したのは、セデック語パラン方言の古い資料（Bullock 1874: 40）において「女」の形式が *makaidil* [maqajdil] と表記されていたことに基づいている [4]。しかも、アタヤル祖語の語根においても次末音節の母音は *ay* である。このセデック祖語の形式から期待されるセデック語トゥルク方言の形式は *q<ər>ayɟil* となるが、実際の形式では前次末音節の母音 *ay* がなぜか *i* に変わっている [5]。

「女」についてアタヤル祖語は *kaydil でセデック祖語は *qaydil であるが、語頭子音が *k* か *q* かで異なるが、アタヤル語群祖語に再建される形式はアタヤル祖語と同一形式の *kaydil とした。これについて、オーストロネシア祖語の「木」は *kaSiw というが（Blust and Trussel 2010）、Li（1981: 248）によるとアタヤル語群祖語において *kahuy またはそれに化石後方接尾辞 *kahu-niq が再建される。セデック語パラン方言では *quhuni*、セデック語トゥルク方言では *qəhuni* であり、語頭が *k から *q* に変化している。そのためセデック祖語は *qaydil も同様の変化を経たと考えた。また、アタヤル祖語において挿入されている化石前方接中辞は *<ən> であり、セデック語トゥルク方言において挿入されている化石前方接中辞は *<ər>* である。同一語根の語でありながら、挿入される化石前方接中辞の形式が異なっている。

１．２　「楠」―化石中央接中辞

「楠」について、アタヤル語スコレック方言の形式 *rəkənus* は小川（1931: 112）から引用した。Li（1985: 258）はアタヤル語スコレック方言の一変種において *k<ən>us* という形式があり（これは小川の形式 *rək<ən>us* から前次末音節の *rə* が脱落したもの）、この中の *<ən>* が接中辞（本稿で言うところの化石中央接中辞）であると述べている。また、Li（1985: 258）はツオレ方言の一変種において表１に挙げたように、*rak<in>us* という形式がみられるが、その中の *<in>* が接中辞（本稿で言うところの化石中央接中辞）であると述べている。アタヤル語スコレック方言の「楠」に挿入されている化石中央接中辞は *<ən>* であるが、これは本来 *<in>* であったものが、過度な母音の弱化により *i* が *ə* に変わったものと考えられる。というのも Li and Tsuchida（2009: 355）において、本稿筆者がアタヤル語の化石中央接中辞と判断する例では *<in>, <il>, <i>* という三種類の形式のみが見られ、母音が *i* であることが共通した特徴であるためである。

セデック語において「楠」の形式には、アタヤル語に見られるような化石中央接中辞の挿入はない。セデック語の形式 *cakus*（パラン方言）と *sakus*（トゥルク方言）で、これらから再建されるセデッ

4　カギ括弧内における音声的表記は本稿筆者が推定したものである。

5　査読者の一人から、セデック語トゥルク方言では*qi*という音連続の場合にその間に渡り音のような*e*が入り、*qey* [qej]と聞こえるので、このような*qey*と音声的に似ている*qay*が過剰修正を受けたのではないかという指摘があった。なお、このような音声的変化はトゥルク方言だけではなくパラン方言でも同様に見られる。

ク祖語は *cakus である（セデック語トゥルク方言では *c* が *s* に変わるため）。このセデック祖語の形式は、オーストロネシア祖語の形式 *dakəs の反映形である。ただし、セデック祖語においてオーストロネシア祖語の語頭子音の *d* がなぜ期待される反映形の *d* ではなく *c* になるのかは不明である。一方、アタヤル祖語では語頭を *r で再建したが、これはアタヤル語群祖語の *d に遡るため[6]、オーストロネシア祖語の形式における語頭子音を反映した。

アタヤル語群祖語の形式は *dakus または *cakus と再建した。語頭子音が *d* の形式はアタヤル祖語を基に再建される。また、語頭子音が *c* の形式はセデック祖語を基に再建される。化石中央接中辞の挿入は、アタヤル語にのみ見られた。管見の限り、化石中央接中辞の挿入は「楠」に限らず、アタヤル語にのみ見られる。現在のところ、セデック語の語彙において化石中央接中辞が挿入された例は見つけられないと、落合（2021）で述べられている。そのため、セデック語を主眼とする本稿では、化石中央接中辞は扱わない。

1．3 「顔」―化石後方接中辞

「顔」について、アタヤル語スコレック方言の形式 *rəqi<ya>s* とアタヤル語ツオレ方言の形式 *ra?i<ya>s* は Li（1985: 258）から引用した。スコレック方言の *q* はツオレ方言では *?* に対応する（Li 1981: 250）。Li（1985: 258）はそれぞれの形式の接中辞の位置も、表 1 に挙げたように表示している。挿入されている化石後方接中辞はどちらも *<ya>* であるが、Li（1985: 258）はこれが *<ra> に遡ると述べている。オーストロネシア祖語の形式 *daqiS における前次末音節の母音 *a* を参照し、再建されるアタヤル祖語の形式は *raqi<ra>s となる（3．3節に関わるが、語頭の *r は *d に遡ることに留意されたい）。

セデック語のトゥルク方言の形式は Li（1985: 258）から引用した。Li（1985: 258）は接中辞の位置も、表 1 に挙げたように表示している。Li（1985: 258）はセデック語パラン方言の形式も *dəqe<ra>s* として、接中辞の分節とともに挙げている。表 1 ではパラン方言の形式も *duqe<ra>s* とした、つまり前次末音節の母音を *u* とした（前次末音節 *u* はパラン方言における弱化母音を表す）。Blust and Trussel（2010）によるオーストロネシア祖語の形式 *daqiS における前次末音節の母音が *a* であること参照し、セデック語の二方言の「顔」の形式から再建すると、セデック祖語の形式は *daqə<ra>s となる。オーストロネシア祖語の形式 *daqiS から、セデック祖語の次末音節の母音として期待されるのは *i*（**daqi<ra>s）だが[7]、セデック語パラン方言では *e*、セデック語トゥルク方言では *ə* で現れるため、この音対応から暫定的に *ə で再建している（Ochiai（2018: 24–27）にあ

6　Li（1981: 253）が述べるようにアタヤル語群祖語の*dはアタヤル語で規則的に*r*に変化した。

7　二重のアステリスク（**）は仮定上の形式であることを示す。

るように、前次末音節の *ə はトゥルク方言では *a* で保存され、パラン方言では *e* に変わるため）[8]。

更に、アタヤル語群祖語をアタヤル祖語とセデック祖語の形式を基に再建すると「顔」は *daqis となる。アタヤル祖語においてもセデック祖語においても同一形式の化石後方接中辞 *<ra> が挿入されている。

1．4　本稿のねらい

三種類の化石接中辞の中、本稿が扱うのはセデック語の語彙において見られる化石前方接中辞と化石後方接中辞の二つである。Li and Tsuchida（2009）は、台湾オーストロネシア諸語やその他のオーストロネシア諸語から、化石前方接中辞が付加した語例を挙げている。ただし、Li and Tsuchida（2009）の検討した言語にアタヤル語は含まれているが、セデック語は含まれていない。本稿はその不足を補うことができる。本稿は、セデック語に見られる化石接中辞である化石前方接中辞と化石後方接中辞について、それらが付加されている語形をより多く特定する。化石前方接中辞と化石後方接中辞についての先行研究 Li and Tsuchida（2009）ではアタヤル語群からはアタヤル語のみ扱い、セデック語は扱っていない。また、Li（1985）ではアタヤル語とセデック語の両方について言及しているものの、ほとんどがアタヤル語からの例である。これまでにセデック語における化石前方接中辞と化石後方接中辞の付いた語例はほんの数例しか特定されていなかった。筆者は 2010 年頃からセデック語パラン方言の調査を 10 年に亘り続け、言語データを蓄積してきたため、パラン方言のデータをトゥルク方言の資料と照らし合わせることができる。そのため本研究では、セデック語トゥルク方言の辞典、Rakaw 他（2006）にある項目の一つ一つにつき、セデック語パラン方言の同源語を特定し、トゥルク方言とパラン方言の形式を比べて、化石前方接中辞か化石後方接中辞が付加しているかどうか調べるという方法を採った。２節では化石前方接中辞について論じる。３節では化石後方接中辞について論じる。それぞれの節で、化石接中辞が挿入された語のデータ、音韻的説明、化石前方接中辞の再建、化石接中辞の有無による意味的差異、通言語的な分析などを見る。

オーストロネシア祖語における化石前方接中辞に関して、Li and Tsuchida（2009）では、その機能が不明であることを述べているが、Blust（2013: 389–392）ではオーストロネシア祖語における *ar という接中辞（本稿における化石前方接中辞）の機能について、複数性を表すものであるとしている[9]。ただし、２節で見るように現代のセデック語における化石前方接中辞を持った語が複数

8　セデック祖語の「顔」を*daqi<ra>sと再建する可能性もある。その場合、セデック語パラン方言では前次末音節の*i*が、直前の子音*q*の影響によって調音位置が低くなって*e*に変わった可能性がある。セデック語トゥルク方言において*i*が*a*になったのも同じ理由で説明できるかどうかはわからない。

9　Blust（2013: 389–392）によるこの祖形は、Li and Tsuchida（2009: 358）がオーストロネシア祖語として再建した*al、*aR、*aNに相当するものである。

を表す例は見つからなかった[10]。

Li and Tsuchida（2009）が多くの例を挙げていることから分かるように、化石前方接中辞はオーストロネシア祖語に広く見られる接中辞である。それに反し、化石中央接中辞と化石後方接中辞は管見の限り、他のオーストロネシア諸語には見られず、アタヤル語群に特有の接辞であると言える[11]。

ここまで化石接中辞の紹介のためにオーストロネシア祖語との比較により化石接中辞の特定した先行研究を紹介した。本研究の目的はセデック語における方言比較や内的再建により、セデック語における化石接中辞の特定を行うことである。そのためセデック語の二つの方言における同源語の形式に、化石接中辞の有無による違いが見られる場合のみ、化石接中辞の存在が特定される。セデック語の両方言において、どちらも化石接中辞を持った形式を有する場合には、その化石接中辞は特定されえない。

2．化石前方接中辞[12]

本節ではセデック語トゥルク方言またはセデック語パラン方言の一方に化石前方接中辞が付加されている語を示す。セデック語トゥルク方言の形式は特に説明のない限り Rakaw 他（2006）から、セデック語パラン方言の形式は筆者の調査ノートからである。化石前方接中辞が付加されていない形式を基に、セデック祖語も再建した。注釈についてはそれぞれの方言における語義を基に判断しているが、パラン方言において語義が多少異なる場合は、その列に注釈を加えている。

2.1　データ

表２はセデック語トゥルク方言またはセデック語パラン方言の一方に化石前方接中辞が付加されている語を示す。表中の語には通し番号を振っているが、（15）については、パラン方言の同源語が見られず、トゥルク方言内部において化石前方接中辞の有無が観察される。同源語の特定において、パラン方言の側に完全に一致する形式は見つからないが、接尾辞 *-an*（非動作主態・場所主語を表す）のついた形式が見つかる場合があった。表２では（11）と（13）がそれに当たる[13]。

10　２.３節では、アタヤル語において一例だけ化石前方接中辞が挿入された語が複数性を表すと考えられる例が見られた。もしかしたら、アタヤル語群の早期において化石前方接中辞には複数性を表す機能があったのかもしれないが、現代のアタヤル語群においてその痕跡を見つけることはできない。

11　ちなみに、アタヤル語群には化石接尾辞も見られ、これも管見の限り、他のオーストロネシア諸語には見られず、アタヤル語群に特有の接辞であると言える。

12　筆者のフィールド調査によると、セデック語パラン方言の音素は母音/a e i o u/、二重母音/ uy/、子音/p b t d ʦ k g q s x h m n ŋ l r w y/である。母音*o*と*e*はそれぞれ二重母音*aw*と*ay*に遡る。月田（2009: 56 –62）によると、セデック語トゥルク方言は母音/a i u ə/、二重母音/aw ay uy/を持ち、子音ではパラン方言と同じだが/ʦ/がない。

13　表２の（13）における「葉」とそこから派生される「夏」についてはOchiai（2019）に詳述されている。

表２　トゥルク方言とパラン方言における化石前方接中辞

	セデック祖語	トゥルク方言	パラン方言	注釈
(1)	*bəhəŋil	*bəhəŋil*	*b<ur>uheŋin*	ススキ
(2)	*səmusaq	*səmusaq*	*s<ur>umusaq*	（水が）濁った
(3)	*halus	*halus*	*h ulas*, *h<ur>ulas*	唾液
(4)	*səqəmu	*səqəmu*	*s<ur>uqemu*	トウモロコシ
(5)	*hənaŋ	*hənaŋ*	*h<ur>enaŋ*	音、声
(6)	*bəənux	*bəənux*	*b<ur>eenux*	平野
(7)	*qədis	*qəɗis*[14]	*q<un>edis*	（物の長さが）長い
(8)	*həmadan	*həmadan*	*h umadan*	自分とは異性の兄妹
(9)	*siqaw	*siqaw*	*mu-s<ur>iqo*	斜視の
(10)	*qəqah	*qəqah*, *q<əl>əqah*	*q eqah*	踏みつける
(11)	*sə-basuk, *sə-busuk	*sə-b<ər>asuk*	*su-busuk-an* しゃっくりをする	げっぷをする
(12)	*qədil	*q<ər>iɗil*	*qedin* 妻	女
(13)	*rabaw	*r<ən>abaw*	*rubag-an* 夏	葉
(14)	*bəəbu	*bəəbu*, *b<ər>əəbu*	*beebu*	殴る
(15)	*bəhibuŋ	*məhibuŋ*, *b<ər>əhibuŋ*	---	黄色い

２．２　音韻についての説明と歴史的音変化についての補足

まず、音韻的な事項について説明する。トゥルク方言、パラン方言ともに強勢が置かれるのは次末音節であり、この音節より前の音節では母音が弱化する。月田（2009: 110–111）によると、トゥルク方言の弱化母音は *ə* として現れる。落合（2016a: 29）によると、パラン方言の弱化母音は *u* として現れる。例えば、トゥルク方言の「夏」は *rəbagan* である一方（Rakaw 他 2006: 655）、パラン方言の同源語は *rubagan* である。表２では（13）にパラン方言の「夏」の形式が挙げられている。ただし、パラン方言において、次末音節が一つの母音のみから成り、これが前次末音節の母音と母音連続を形成する場合には前次末音節に母音の逆行同化が起こり、次末音節と同じ母音で現れる。表２では（6）、（14）にこの変化が見られ、前次末音節と次末音節に母音連続 *ee* が現れる。

セデック語パラン方言の側に見られる歴史的音変化について説明する。まず、セデック祖語の語末 *l は、現代のセデック語パラン方言では *n* に変わっている（Ochiai 2016: 318–319）。表 2 では（1）、（12）にこの変化が見られる。次に、セデック祖語の次末音節における *ə は、現代のセデック語パラン方言では *e* に変わった（Ochiai 2018: 24–27）。表 2 では（1）、（4）、（5）、（7）、（10）、（12）にこの変化が見られる。また、セデック祖語の語末音節における *aw は、現代のセデック語パラン方言では *o* に変わった。表２では（9）にこの変化が見られる。

（14）はトゥルク方言において化石前方接中辞の付加されていない形式 *məhibuŋ* と付加された形式 *b<ər>əhibuŋ* が見られるが、それらの語頭子音が異なる。語頭子音が *m* から始まる形式は

14　Rakaw他（2006）におけるトゥルク方言変種では、音素*d*が母音*i*の前で口蓋化を起こすため、この例では*ɗ*になっている。（12）も同様である。

Pecoraro（1977: 173）に見られた[15]。この形式に関すると考えられる音韻変化がある。落合（2016a: 126–127）によると、セデック語の両唇閉鎖音 *p* または *b* から始まる語に対し、接中辞 *<um>*（動詞に付いて動作主態を表す）が語頭子音の直後に挿入されると、両唇閉鎖音が *m* に置き換わる変化（鼻音代替と呼ぶ）が起きると述べる[16]。これは *pum...* または *bum...* というように両唇音が語頭に連続して現れるのを避けるためと考えられる。語根 *bəhibuŋ* は「黄色い」という色を表す語であり、このような意味範疇の語には、一般的に静態動詞を表す接頭辞 *mə-* が付く。そのため、*mə-bəhibuŋ* という形式が期待されるのだが、ここでも語頭の *məb...* に見られる両唇音連続が避けられて、*b* が *m* に取って代わられる鼻音代替が起きたのではないか。一方、化石前方接中辞の付加されない形式 *b<ər>əhibuŋ* では、静態動詞を表す接頭辞が付加していないと考えられる[17]。

また、（11）におけるトゥルク方言の形式は Li（1981: 278）から引用した。小川・浅井（1935: 559）によるとトゥルク方言はトゥルク支族とトダ支族を含むが、この形式はトダ支族の集落からのものである。ちなみに、語頭の *sə-* は接頭辞であると判断している。これは Blust and Trussel（2010）においてオーストロネシア祖語に *ma-busuk「酔った」が再建されているからであり、この祖形の語根は *busuk である。トゥルク方言の形式はこの祖形の反映形である。ただし、この形式から期待される形式は *sə-b<ər>usuk* であるが、実際の形式は次末母音が何故か *a* で現れ、*sə-b<ər>asuk* である。セデック祖語には次末音節に *a* を持つ **sə-basuk* を再建したが、同時にオーストロネシア祖形の語根 *busuk を尊重した形式として、次末音節に *u* を持つ **sə-busuk* も交替形として再建した。

２．３　化石前方接中辞の有無による意味的差異

トゥルク方言において、化石前方接中辞の付加しない形式と付加した形式の両方が見られる場合がある。それらは（10）、（14）、（15）の三つである。二つの形式間の意味的差異について考えたい。このうち（10）の *qəqah* と *q<əl>əqah*、（15）の *məhibuŋ* と *b<ər>əhibuŋ* において、化石前方接中辞の有無による意味の差異は認められない[18]。それぞれの形式は自由交替の関係にあるらしい。しかし、(14)の *bəəbu* と *b<ər>əəbu* には動作の強度において差が認められるようである。Rakaw 他（2006: 97, 140）によると化石前方接中辞の付加しない *bəəbu* は「打つ、殴る」であるのに対し、化石前方接中辞の付加した *b<ər>əəbu* は「めった打ちする」となっている。この例では化石前方接中辞の付加した形式のほうが動作の強度が強い。

15　Pecoraro（1977: 173）における実際の表記は*mxebong*であるが、本稿では表記に修正を加えている。

16　落合（2016a: 126–127）はパラン方言の鼻音代替について述べているが、月田（2006: 117–118）によると、トゥルク方言にも同様の変化が起きる。

17　査読者のお一人から、化石前方接中辞*<ər>*が挿入されることで、静態動詞の接尾辞の代わりになっているという可能性はあるかとのご指摘を受けたが、現在のところはそれを支持する証拠を見いだせない。

18　例（10）における化石前方接中辞の付加しない形式*qəqah*はPecoraro（1977: 98）から引用した。出典における綴りはk̓ kaxである。

化石前方接中辞が付加する際の意味的機能を、現代のセデック語の両方言において見出すことはできないが、トゥルク方言の *bəəbu* と *b<ər>əəbu*（14）に見られたように、動詞語根に対し化石前方接中辞の付加することで動作の強度がより強いことを表す機能が本来あったのかもしれない[19]。

これに関し、セデック語に最も系統的に近いアタヤル語においても、類似の記録が見られた。Guérin（1868: 484）は、アタヤル語を記録した資料の中でも最初期のものであるが、その中に *paŋa* と *pilaŋa* という、ともに「運ぶ」を意味する二語が挙げられている。前者は化石前方接中辞の付加しない形式、後者は化石前方接中辞の付加した形式 *p<il>aŋa* と考えられる[20]。Guérin（1868: 484）において、化石前方接中辞が付加しない形式は単に「運ぶ」の意味なのに対し、化石前方接中辞が付加した形式の方は「二人または複数人で運ぶ」という意味で挙げられており、動作主の複数性を表すらしい[21]。上記のトゥルク方言の例にしても、このアタヤル語の例にしても、意味的差異の見られるのは一対の例のみであるため確証は持てないが、本来は動詞語根に化石前方接中辞が付加することにより、動作が強いことや動作主が複数であることを表していたのかもしれない[22]。

２．４　化石前方接中辞の再建

表２において、化石前方接中辞が付加しているのは、(1) から (9) まではパラン方言である。(10) ではトゥルク方言、パラン方言の両者である。トゥルク方言では化石前方接中辞が付加した形式と付加していない形式が見られる。(11) から (15) まではトゥルク方言に化石前方接中辞が付加している。

表２の形式を概観してまずわかるのは、化石前方接中辞は (3)、(5)、(7)、(9)、(10)、(11)、(12)、(13)、(14) にあるように二音節語根にも付くが、その他の例のように三音節語根にも付いていることである。そして化石前方接中辞の形式は、トゥルク方言では *<əl>*、*<ən>* または *<ər>* が見られ、パラン方言では *<ul>*、*<un>*、*<ur>* が見られる[23]。それぞれの化石前方接中辞が付加する語は方言によって異なっているが（ただし、(10) のみ両方言の同源語に、同一由来の化石前方接中辞の付加が見られる）、化石前方接中辞の形式の点においていずれの方言も対応する形式を所有して

19　ただし、(13) の*rabaw「葉」のように語根が名詞である場合、化石前方接中辞が付加してもしなくても意味は同じである。化石前方接中辞の付加で複数性を表していた可能性もあるかもしれないが、現時点でのデータでは化石前方接中辞の付加が本来どのような意味的機能を持っていたかは不明である。

20　期待されるのは接中辞が曖昧母音の*p<al>aŋa*であるが、この方言変種では前次末音節より前の曖昧母音が*i*になる傾向があったのだろうか。

21　Guérin（1868: 484）における実際の表記と意味は、*panga*が porter、*pilanga*が porter à duex ou plusieursである。補足すると、この語の本来の意味は「手で運ぶ」ではなく、「背負う」、「背に載せて運ぶ」である。Guérin（1868: 484）による後者の形式の注釈は、獲物を運ぶ際に、棒などに吊るして複数人で運ぶ場面が想起される。

22　動作が強いことのほかに動作が複数回行われることも意味したかもしれない。

23　化石前方接中辞の三つ形式のうち、トゥルク方言の*<ən>*とパラン方言の*<un>*はそれぞれの方言における非動作主態（対象主語）・過去の接中辞*<<ən>*と*<un>*と同一の形式である。本稿はこれらが同音意義の形式であると考える。

いる。化石前方接中辞の母音が現れるのは、二音節語根に付加した場合は前次末音節、三音節語根に付加した場合は前々次末音節であり、いずれも母音弱化を被る音節である。そのため、それぞれの方言における化石前方接中辞の形式は弱化母音と直後の子音から成る。子音はいずれの方言においても *l* か *n* か *r* かである。これらの子音の選択は恣意的であると見なせる。このうち *l* と *r* は流音、*n* は鼻音であるが、ともに歯頚部の非阻害音という点で共通している。セデック祖語の弱化母音は *ə と再建されうるため、セデック祖語における化石前方接中辞の形式は *<əl>、*<ən> または *<ər> となる。

Li and Tsuchida（2009: 358）は台湾オーストロネシア諸語やその他のオーストロネシア諸語における化石前方接中辞を概観した上で、オーストロネシア祖語における化石前方接中辞を再建している。Li and Tsuchida（2009: 358）がオーストロネシア祖語に再建した化石前方接中辞は *al、*aR、*aN の三つである。これらオーストロネシア祖語の化石前方接中辞の再建形を加え、これまでの議論を表３にまとめる。

表３　セデック祖語・アタヤル祖語・アタヤル語群祖語・オーストロネシア祖語の化石前方接中辞

セデック祖語	*<əl>	*<ən>	*<ər>	
セデック語トゥルク方言	*<əl>*	*<ən>*	*<ər>*	
セデック語パラン方言	* *	*<un>*	*<ur>*	
アタヤル祖語	*<əl>	*<ən>	*<ər>	*<əg>
アタヤル語スコレック方言	*< əl >*	*<ən>*	?	*<əg>*
アタヤル語ツオレ方言	*<al>*	*<an>*	*<a>*（← *<ar>*）	*<ag>*
アタヤル語群祖語	*<əl>	*<ən>	*<ər>	*<əR>
オーストロネシア祖語	*aN	---	*<al>	*<aR>

表３ではアタヤル語の形式も挙げた。アタヤル語スコレック方言には *<əl>*、*<ən>*、*<əg>* が見られた。後述するが、*<əl>* は Guéin（1868: 484）に *p<əl>aŋa*「複数人で運ぶ」が見られる。*<ən>* は表１にあるように「女」の形式 *k<ən>ayril* に見られる。*<əg>* は Li and Tsuchida（2009: 354）において *b<əg>alaw*「栴檀」という形式中に見られる。管見の限り、アタヤル語スコレック方言において *<ər>* の例は見つけられなかったが、今後見つかるかもしれない。

アタヤル語ツオレ方言には *<al>*、*<an>*、*<a>*、*<ag>* が見られた。*<al>* は Li and Tsuchida（2009: 354）において *k<al>ahaŋ-an*「世話をする」という語に見られる。*<an>* は表１にあるように「女」の形式 *k<an>ayrin* に見られる。*<a>* は Li and Tsuchida（2009: 354）において *w<a>yluŋ*「鶏」という語に見られる。<ag> は Li and Tsuchida（2009: 354）において *k<ag>isi*「背負いかご」という語に見られる[24]。

化石前方接中辞 *<a>* はこれまでセデック語の二つの方言やアアタヤル語スコレック方言で見て

24　Li and Tsuchida（2009）において母音終りのアタヤル語の形式には全て声門閉鎖音が後続している。同様の表記法はLi（1981）にも見られるが、本稿ではこの声門閉鎖音は音声的な表れであると考え表記しない。

きた形式と異なり、子音を含んでいない。この形式は早期には *<ar> であったと推定される。この形式はアタヤル語ツオレ方言の諸変種のうち、マリナハ集落（Mayrinax）から収集されたもので、Li and Tsuchida（2009: 354）は、化石前方接中辞 *<a>* を、マリナハ集落の形式のみを基に挙げた。マリナハ集落のツオレ方言変種は、他のツオレ方言の変種とは異なる音韻変化を経たことが観察できる。３．４節において、アタヤル祖語の化石後方接中辞を *<ra> と再建するが、スコレック方言を含め他のツオレ方言では *<ra> から変化した *<ya>* という形式を有するのに対し、マリナハ集落では子音を脱落させた *<a> として現れる。例えば、ツオレ方言を話すマスパジ集落（Maspazi）における「四」の形式は *sapa<ya>t* であるのに対し、マリナハ集落では *sapa<a>t* である[25]。このようにマリナハ集落では *r* が脱落する音韻変化が見て取れる。セデック語の二つの方言やアタヤル語スコレック方言の化石前方接中辞がすべて子音を持っているように、化石前方接中辞の *<a>* も、本来は子音 *r* を含み *<ar>* であったのではないか考えた。また、アタヤル語ツオレ方言では次末音節より前の弱化母音は *a* になる傾向がある（Huang 2018: 273）。そのため次末音節よりも前に現れる化石方接中辞の中の母音はツオレ方言では *a* で現れる。これは、オーストロネシア祖語の *a を保存しているのではなく、本来の弱化母音である *ə* がさらに *a* に変わったものと考えられる。

上記の点を考慮して、アタヤル祖語の形式を再建する。アタヤル語スコレック方言の *<əl>* とアタヤル語ツオレ方言の *<al>* は同源の化石前方接中辞であり、これらを基に再建されるアタヤル祖語の形式は *<əl> である。同様に、アタヤル語スコレック方言の *<ən>* とアタヤル語ツオレ方言の *<an>* は同源の化石前方接中辞であり、これらを基に再建されるアタヤル祖語の形式は *<ən> である。アタヤル語スコレック方言の *<əg>* とアタヤル語ツオレ方言の *<ag>* は同源の化石前方接中辞であり、これらを基に再建されるアタヤル祖語の形式は *<əg> である。アタヤル語スコレック方言に対応形式は見つけられなかったが、アタヤル語ツオレ方言の *<a>* とその古い形式として推定される *<ar> を基に再建されるアタヤル祖語の形式は *<ər> である。

さらにオーストロネシア祖語に再建されている形式も参考にしながら、セデック祖語とアタヤル祖語の形式を基に、アタヤル語群祖語の形式を再建してみる。セデック祖語の *<əl> とアタヤル祖語の *<əl> から再建されるアタヤル語群祖語の形式は *<əl> である。これはオーストロネシア祖語の *<aN> に遡ると考えられる[26]。セデック祖語の *<ən> とアタヤル祖語の *<ən> から再建されるアタヤル語群祖語の形式は *<ən> である。これは遡るべきオーストロネシア祖語の形式が再建されていない。アタヤル語群特有の化石前方接中辞の形式と言えるだろう。

25　Li（1981: 264）に、マリナハ集落とパルガワン集落において同一母音の間で *r が消失するとある。この語 *sapa<a>t* ではこの音韻変化のために、本来 *sapa<ra>t* であった形式から同一母音の *a* の間で *r* が消失したことになる。

26　Blust and Truessel（2010）において*Nと再建されるオーストロネシア祖語の音素は、Ross（2005: 32）における*Lに相当する。この音素はオーストロネシア諸語のそれぞれの言語によって*l*や*n*その他で反映されるが、研究者によって*Nを使うか*Lを使うかが分かれる。本稿ではBlust and Truessel（2010）の表記を採用する。

アタヤル祖語の *<ər> と *<əg> に関して、アタヤル語群祖語の形式を考えるとどうなるだろうか。これらの形式はそれぞれ、オーストロネシア祖語の *<al> と *<aR> を反映している。オーストロネシア祖語の *l がアタヤル祖語で *r になり、オーストロネシア祖語の *R がアタヤル祖語で *g になるのは、Li（1981: 274）によると規則的な変化である[27]。

セデック祖語における反映を見ると、オーストロネシア祖語の *<al> に対応する *<ər> は見られるが、*<aR> を反映した *<əg> は見られない。オーストロネシア祖語の *l がセデック祖語で *r になるのは、Li（1981: 275）によると規則的な変化である。

セデック祖語の *<ər> はオーストロネシア祖語の *<al> に遡るほかに、オーストロネシア祖語の *<aR> に遡る可能性もある。落合（2020b: 65–66）はオーストロネシア祖語の *R がセデック語において *r* または *g* で不規則的に反映されることについて説明している。オーストロネシア祖語の *<aR> についてセデック祖語では *<əg> ではなく *<ər> にすることを選んだのではないか。だとするとオーストロネシア祖語の *<al> と *<aR> はセデック祖語において *<ər> に合流したことになる。

セデック祖語の形式 *<ər> は、アタヤル祖語の *<ər> に対応するだけでなく、*<əg> にも対応する。セデック祖語の *<ər> とアタヤル祖語の *<əg> はオーストロネシア祖語の *<aR> を反映していると本稿は考える。ここから、これら二つの形式に対応するアタヤル語群祖語の形式として、子音 *g* か *r* かどちらかを選ぶのではなくて、どちらに変化する可能性もあるという意味を込めて、オーストロネシア祖語とほぼ同形の *<əR> を再建するのが妥当ではないだろうか。

２.５　他言語との比較

本節では、セデック語の化石前方接中辞について、それが付加する語の形式が他のオーストロネシア諸語とは異なる様相を呈することを述べる。これはセデック語だけでなくアタヤル語にも言える特徴である。

Li and Tsuchida（2009）では、オーストロネシア諸語のうち 18 言語から化石前方接中辞の付いた形式を挙げている。そのうちの大多数を占める 16 言語が台湾オーストロネシア諸語からである。残りの二つの言語はタガログ語とジャワ語である。Li and Tsuchida（2009）の挙げた 18 言語のうちアタヤル語を除く 17 言語に関して、化石前方接中辞は、それぞれの言語のほぼ全ての語例において歴史的重複語と呼ばれる特殊な成り立ちの語基に付加している[28]。歴史的重複語とは C_1VC_2 という単音節を最小単位とするが（C_1 と C_2 はそれぞれが異なる子音であることを示す）、それだけでは語として成り立たず、重複させて $C_1VC_2C_1VC_2$ とすることで語として成り立つものである。化石前方接中辞は <VC> の音節構造を持つため、歴史的重複語にこれが付加されると、C_1<VC>$VC_2C_1VC_2$ という構造を持った語が生じる。言語によっては語中の子音連続 C_2C_1 を回避す

27　Li（1981: 274）によるとアタヤル語群祖語の*Rはアタヤル語において*r*に変わる場合もある。

28　この点について論述した先行研究があるのだろうと思われるが、管見の限り見つけられなかった。

るためにこの間に母音が挿入され、C_1<VC>VC_2-V-C_1VC_2 となることもある。

Li and Tsuchida（2009）がそれぞれの言語について挙げた化石前方接中辞の付加した形式について、それが歴史的重複語基に付いていると本稿筆者が判断した語数と、歴史的重複語ではない語基についている語数を表にまとめた。それぞれの言語において、歴史的重複語に付いた語例、歴史的重複語でない語に付いた語例も加えた。

表4　オーストロネシア諸語において化石前方接中辞が歴史的重複語に付く割合

言語名（総語例数）	歴史的重複語の語例数	それ以外の語例数
アタヤル語（11）	1 例：s<ag>asap「ひさし」[29]	10 例：w<a>ylung「鶏」
サオ語[30]（34）	34 例：*q<ar>afqaf*「家」	0 ---
バブザ語[31]（3）	3 例：*r<ar>icherich*「計測のために刀による印を刻んだ小片」	0 ---
カバラン語[32]（21）	15 例：*t<r>aqitaq*「おしゃべりな」	6 例：*k'<r>avao*「水牛」
バサイ語[33]（9）	8 例：*p<al>angpalng*「鍋、水甕」	1 例：*k<an>aba*「モルタル」
シラヤ語[34]（11）	11 例：*h<ar>ilhil*「なめらかな」	0 ---

29　Li and Tsuchida（2009: 354）において、この語の同源語として別の集落から*sabsab*という形式が挙げられている。そのため、本来は歴史的重複語に化石前方接中辞が挿入され*s<ag>absab*になり、語中の子音連続*bs*の全部要素の*b*が脱落し、語末子音の*b*が無声化して*p*になる変化を経たと考えられる。

30　Li and Tsuchida（2009: 347）におけるサオ語の歴史的重複語には語末に歴史的音変化が生じたものが見られる。例えば*b<ar>imbin*「乗り物」という語がある。本来の語基は*bimbim*であったが、語末の*m*が突発的に*n*に変わったのだろう。Chang（1998: 285）には*zumzum*「口にくわえ続ける」のような歴史的重複語の例が挙がっているが、ここでは重複語根のコーダ*m*は重複語の語末でも*m*で保たれている。

31　Li and Tsuchida（2009: 347）におけるバブザ語の語例にはCVを重複したCVCVの構造をもつ*soso*とCVCVを重複したCVCVCVCVの構造をもつ*lesoleso*という語基が見られた。これらは典型的なCVCVCVC型の歴史的重複語ではないが、これらも歴史的重複語の例に含めた。

32　Li and Tsuchida（2009: 347）におけるカバラン語には、*k<r>awkaway*「仕事」、*k<r>imkimay*「サンゴの一種」、*q<r>imqimun*「開け閉めする」という例が見られる。これらは歴史的重複語の語基として*kawkaw*、*kimkim*、*qimqim*を持っていたと分析し、表4では歴史的重複語に含めた。ただ、これらの語基の後にそれぞれ*ay*、*ay*、*um*という機能の不明な要素が付けられている。もしくは*kaway*、*kimay*、*qimun*が語根で、そこから語頭のCVCを重複して前に付けることで*kawkaway*、*kimkimay*、*qimqimun*を派生し、さらに化石前方接中辞を付けたとも考えられそうだが、今後の検討課題とする。また、CVVが重複し、CVVCVVという語基を持つ語*piapia*に対し、化石前方接中辞が付加した例*p<l>iapia*「植物の一種、オオバギ」も、典型的な歴史的重複語の型ではないが、表4では歴史的重複語に含めている。

33　Li and Tsuchida（2009: 348）におけるバサイ語の語基には*bakibaki*、*kimikimi*、*lisilisi*があるが、これはCVCVを重複したCVCVCVCVの型を持つ。また、*sabaisabai*という語基を持つものもあるが、これはCVCVVを重複したCVCVVCVCVVの型を持つ。どちらも典型的な歴史的重複語の型ではないが、表4では歴史的重複語に含めている。

34　Li and Tsuchida（2009: 348）におけるシラヤ語の語基には*pupu*が見られる。これはCVを重複したCVCV型である。典型的な歴史的重複語の型ではないが、表4では歴史的重複語に含めている。

アミ語[35]（90）	82 例：*ng<al>iwngiw*「不満を言う」	6 例：*k<al>iling*「スプーン」
サイシヤット語[36]（5）	4 例：*k<aL>izikiz*「わきの下の横」	1 例：*s<aL>abong*「日照不足で苔が生える」
パゼッヘ語[37]（5）	4 例：*b<ar>naban*「甕」	1 例：*p<a>isuzuk*「隠れている」
ブヌン語（16）	14 例：*pis-t<an>aqtaq*「遊ぶ」	2 例：*t<an>uduq*「指」
パイワン語（49）	43 例：*dj<ar>emdjem*「霧雨が降る」	6 例：*tj<ar>ra-keDi*「とても小さい」[38]
プユマ語[39]（39）	36 *s<al>iwsiw*「若鶏の鳴き声」	3 *p<al>etik*「水が撥ねる音」
ツォウ語（1）	1 例：*p<r>e'pi'i*「まゆ毛」[40]	0 ---

35 Li and Tsuchida（2009: 348）におけるアミ語の語基には*eses*というVCを重複したVCVC型を持つものが見られた。これは典型的な歴史的重複語の型ではないが、表4では歴史的重複語に含めている。この語に付く化石前方接中辞は*<alh>*という形式であり、*alh-eses*「小さな音」という語が挙げられている。この語が特別な点は、化石前方接中辞が、まるで接頭辞のように語頭に現れることである。これは語基が母音始まりということに依る。

36 Li and Tsuchida（2009: 350）におけるサイシヤット語の例には*ka-k<l>okoeh*「爪」が含まれている。これはLi and Tsuchida（2009: 350）が指摘するように、接頭辞*ka-*と化石前方接中辞*<l>*を除いた部分に当たる*kokoeh*は、オーストロネシア祖語*kuSkuS「爪」（Blust and Trussel 2010）の反映形である。そのため、本来は歴史的重複後であったが、重複前部の最終子音（*Sを反映した*h*）が脱落したことになる。また、最終音節の母音は音韻的に*o*であるが語末子音*h*の影響を受け、音声的に*oe*に代わっている。この*oe*が声門位置の子音*h*または*q*の直前直後で現れることはLi（1978: 140）が述べている。

37 Li and Tsuchida（2009: 350）におけるパゼッヘ語の例にはk<al>ikux「爪」が含まれている。これはLi and Tsuchida（2009: 350）が指摘するように、そして上記のサイシヤット語と同様、接中辞*<al>*を除いた部分に当たる*kikux*は、オーストロネシア祖語*kuSkuS「爪」（Blust and Trussel 2010）の反映形である。重複語根は*kux*であるが、この語基は本来の歴史的重複語*kuxkux*から、*kikux*に変わったと見受けられる。おそらく初めに第一音節のコーダが脱落し*kukux*となり、そのご第一音節の母音が突発的に*i*に変わったのだろう。

38 Li and Tsuchida（2009: 351–352）によると、この形式は語根*keDi*「小さい」から派生される。この語から派生される例として他に、*tj<ali>a-keDi-keDi*「最も小さい」も挙げられている。語根*keDi*の重複語基*keDi-keDi*を含むが、これは生産的派生によって形成された語と判断し、歴史的重複語に含めない。また、化石前方接中辞が入る位置は、重複語基の中ではなくて、接頭辞の中である点が、歴史的重複語における化石前方接中辞の入る位置とは異なる。

39 プユマ語において歴史的重複語以外に化石前方接中辞が挿入されている3つの語例には他に*s<al>teb*「木の板に斧を打つ音」と*s<al>tik*「マッチがパチパチする音」が含まれる。ただし、Li and Tsuchida（2009: 352）よると、これらはそれぞれ歴史的重複語である*tebteb*「斧」と*tiktik*「入れ墨」に由来する。より早くには、これらに対し化石前方接中辞が挿入され*s<al>tiktk*と*s<al>tebteb*という形式があったことが予想される。その後、語末のCVCが脱落したのだろう。もしそうならば、これらは歴史的重複語に化石前方接中辞が挿入されている語例に含まれるべきである。

また、プユマ語において歴史的重複語以外に化石前方接中辞が挿入されている語例の中には、化石前方接中辞が*<a>*という形式を持つものが見られ、この場合は重複語基の語頭子音の直後に挿入するのではなく、語頭のCVの直後に挿入される。例えば*ki<a>pkip*「まつ毛」といった具合である。

40 Li and Tsuchida（2009: 353）によると、この形式はツォウ語の早期において*pikpikであり、化石前方接中辞が挿入され、*k*が*?*（*?*の表記は「ʼ」を用いている）に変わり、語末に*i*が添えられて*p<ar>iʼ piʼ iに変わり、さらに*p<r>e'pi'i*に変わったと述べている。早期の形式は歴史的重複語である。

カナカナブ語[41]（11）	8 例：*k<ar>askas-a*「魚をとるためのかご」	3 例：*um-a<ar>ivi*「子を腕にかかえる」
サアロア語[42]（13）	11 例：*k<al>ungkung-an*「とても痩せている」	2 例：*um-a<ar>iva*「子を腕にかかえる」
ルカイ語[43]（21）	21 例：*g<al>awgaw*「指」	0 ---
タガログ語[44]（49）	46 例：*h<al>akhak*「笑い」	3 例：*b<al>gtas*「道を横切る」
ジャワ語[45]（18）	7 例：*g<l>emgem*「喪に服する静けさ」	11 例：*k<al>amangga*「蜘蛛」

41 Li and Tsuchida（2009: 353–354）におけるカナカナブ語の語例には*sapi*などCVCVの二音節構造を語基に持ち、*s<an>apisapi*「流木」のように重複語基に化石前方接中辞を挿入したものも見られた。これらは典型的なCVCVCVC型の歴史的重複語ではないが、これらも歴史的重複語の例に含めた。また、カナカナブ語の例に*pa-t<al>u(ng)-tungku-an*「カポックの木」が挙げられている。この語の語根は*tungku*だろうが、語根の第一音節のみを重複して*tung-tungku*という重複語基を作った後で化石前方接中辞が挿入され*t<al>u(ng)-tungku*となり、さらに接頭辞*pa-*と接尾辞*-an*がそれを囲んでいる。この形式は語根の一部のみを重複しているという点で、CVCの完全重複を持つ典型的な歴史的重複語の形式とは異なる。ただ、重複している点では一致しているのでここでは歴史的重複語の例に含めた。また、*k<an>eet-a*「あばら骨の中で最も小さいもの」という語も挙げられている。表4において、この語基は歴史的重複語ではないとしたが、Li and Tsuchida（2009: 354）にはルカイ語から同源語として*k<l>ɬtkɬt-a*「鎖骨」が挙げられている。ルカイ語の形式における語基は歴史的重複語であるから、カナカナブ語の例も本来の語基は歴史的重複語であった可能性が高い。

42 Li and Tsuchida（2009: 354）におけるサアロア語の語例には*vuka*などCVCVの二音節構造を語基に持ち、*v<an>ukavuka*「ズボン」のように重複語基に化石前方接中辞を挿入したものも見られた。これらは典型的なCVCVCVC型の歴史的重複語ではないが、これらも歴史的重複語の例に含めた。また、サアロア語の例に*pa-t<al>un-tungku-an*「カポックの木」が挙げられている。これは上の脚注のカナカナブ語の例（*pa-t<al>u(ng)-tungku-an*）の同源形式と考えられ、カナカナブ語の形式のように歴史的重複語の例に含めた。また、*k<alh>eet-a*「あばら骨の中で最も小さいもの」という語も挙げられている。これも上のカナカナブ語の例（*k<an>eet-a*）の同源形式と考えられ、本来の語基はルカイ語の形式に見られるように歴史的重複語であった可能性が高い。

43 Li and Tsuchida（2009: 354）におけるルカイ語の語例には*g<l>ogov-a*「涼しい」という形式も見られた。恐らく、重複語根CVCは*gov*であり歴史的重複語として*govgov*が作られ、化石前方接中辞<l>が挿入されて*g<l>ovgov*になり、子音連続*vg*の前部要素*v*が脱落したのだろう。CVCの重複を持つ典型的な歴史的重複語の形式とは異なるが、上記の変化があっただろうことを考慮し、歴史的重複語の例に含めた。また、*te-s<r>esee*「小石が混じった土」に見られる*see*のように重複語根がCVVの音節構造を持つ例も見られた。この例では歴史的重複語が期待される*seeseе*ではなくて、前部の母音が一つ少ない*seseе*である。典型的なの歴史的重複語の音節構造とは異なるが、歴史的重複語の例に含めた。

44 Li and Tsuchida（2009: 356）におけるタガログ語の語例には*t<al>uktok*「頂上」のように、歴史的重複語*tuktuk*または*toktok*から作られたものも見られる。実際の形式における歴史的重複語の語基は*tuktok*であり、前部の母音が*u*、後部の母音が*o*で現れる。前部または後部のどちらか一方が*o*から*u*へ、または*u*から*o*へ変化したと考えられる。類例は*d<al>ubdob*「刃」と*t<ag>uktok*「短くはっきりした音」にも見られた。

45 ジャワ語における歴史的重複語から派生された形式に含まれる語には*t<el>iti*「家系」、*t<r>ata*「ガタガタ言う音」、*k<r>ekes*「言い訳して断られた」が含まれる。これらはLi and Tsuchida（2009: 357）によると、それぞれ歴史的に*taytay、*taktak、*kiskisに遡る。また、*t<r>iti*「粉砕する」は*titiに遡るそうである。この例における重複語根は典型的なCVCではなくCVだが、歴史的重複語の例に含めた。また、Viray（1973）ではタガログ語の他に、セブ語、ビコル語などいくつかのフィリピンの言語から、化石前方接中辞が挿入された形式を列挙しているが、それら形式のほぼすべてが歴史的重複語を語基としている。

表４の大部分の言語において、歴史的重複語に化石前方接中辞が付く例の割合は、歴史的重複語ではない語に化石前方接中辞がつく例より多いことがわかる。その割合が逆転し、歴史的重複語ではない語に化石前方接中辞がつく例のほうが多いのは、アタヤル語とジャワ語の二つの言語だけである。アタヤル語とジャワ語において、少数派である歴史的重複語に化石前方接中辞がつく例の割合を見れば、アタヤル語では 11 例のうちの１例のみであるに対し、ジャワ語では 18 例のうち７例と四割近くを占めている。

このことから、オーストロネシア諸語において、化石前方接中辞は歴史的重複語に挿入される場合が、そうでない語に挿入される場合より多いのに対し、アタヤル語ではその逆で、化石前方接中辞が、歴史的重複語に挿入されることがほとんどないという特徴があることがわかる。さらに言えば、この特徴はアタヤル語群に共通である。表２のセデック語において化石前方接中辞が付加された 15 例の語からわかるように、化石前方接中辞が歴史的重複語に付加された例は一語もない[46]。

３．化石後方接中辞

本節ではセデック語トゥルク方言またはセデック語パラン方言の一方に化石後方接中辞が付加されている語を示す。セデック語トゥルク方言の形式は特に説明のない限り Rakaw 他（2006）から、セデック語パラン方言の形式は筆者の調査ノートからである。化石前方接中辞が付加されていない形式を基に、セデック祖語も再建した。注釈についてはそれぞれの方言における語義を基に判断しているが、パラン方言において語義が多少異なる場合は、その列に注釈を加えている。

３．１　データ

表５はセデック語トゥルク方言またはセデック語パラン方言の一方に化石後方接中辞が付加されている語を示す。

表５　トゥルク方言とパラン方言における化石後方接中辞

	セデック祖語	トゥルク方言	パラン方言	注釈
(1)	*hapuy	*hapuy*	*hupure, pure* （< *hapu<ra>y）	火で調理する
(2)	*adup	*adup*	*s-udu<ra>k*（動物を） 追いかける	狩りをする

46　ただし、セデック語トゥルク方言において歴史的重複語に化石前方接中辞が挿入されている可能性のある語が一語だけ見られた。Rakaw他（2006: 799）における*sərəgəsaw*「夕日」という形式である。もしかしたら化石前方接中辞*<ər>*が挿入された*s<ər>əgəsaw*という成り立ちであり、古くは*sag(ə)sagに遡るかもしれない。ちなみに、Li（1981: 257–258）によるとアタヤル語群祖語の語末*agはセデック語では*aw*に変化する。セデック語の歴史的重複語における語中の子音連続の間には曖昧母音が挿入される（Ochiai 2018）。

(3)	*ŋaŋət	*ŋaŋut*	*ŋaŋuc, ŋe<ra>c*	家の外
(4)	*ahiŋ	*hi<ra>ŋ*	*ahiŋ*	肩
(5)	*rahut	*hu<na>t*	*rahut, hu<na>t*	下り坂
(6)	*bərih	*bərih, bəri<na>h*[47], *ri<na>h*	*bərih, bəri<na>h*	戻る

３．２　音韻的説明と意味的差異

例(1)では、セデック語トゥルク方言の形式に化石後方接中辞の挿入が見られない。一方で、セデック語パラン方言の形式に化石後方接中辞 *<ra>* の挿入が見られるが、このことは Ochiai（2016a: 309–310）に述べられている。語根 *hapuy* に化石後方接中辞が挿入され *hapu<ra>y* となり、前次末音節の母音が弱化して *hupu<ra>y* となり、さらに語末の二重母音 *ay* が *e* に変わって *hupure* となった。ここから前次末音節 *hu* が脱落した *pure* という形式も自由交替形として用いられる。セデック祖語に再建された *hapuy「火で調理する」はオーストロネシア祖語で「火」を表す *Sapuy の反映形である[48]。

例（2）でも、セデック語トゥルク方言の形式に化石後方接中辞の挿入が見られないが、セデック語パラン方言の形式に化石後方接中辞 *<ra>* の挿入が見られる。セデック祖語に再建された *adup はオーストロネシア祖語 *qaNup「獣を狩る」の反映形である[49]。セデック語パラン方言の形式では語根 *adup* に対して、まず接頭辞 *s-* が付いて *s-adup* になったと考えられる[50]。そして化石後方接中辞が挿入されて *s-adu<ra>p* になった。前次末音節の母音が弱化して *s-udu<ra>p* になった。そして、*p* が語末で *k* に変わって *s-udu<ra>k* となった[51]。ちなみに、この形式に接尾辞が付くと、*sudurap-un*（非動作主態・対象主語）になり *p* は語末でなくなるため *k* ではなく *p* のまま現れる。

（3）では、セデック語トゥルク方言の形式に化石後方接中辞の挿入が見られないが、セデック語パラン方言の形式には化石後方接中辞の挿入が無いものと、あるものの二つが見られる。セデック語パラン方言における二つの形式には意味的差異は認められない。セデック祖語は *ŋaŋət と再建した。化石後方接中辞の挿入されていない形式は *ŋaŋut*（トゥルク方言）と *ŋaŋuc*（パラン方言）である。セデック語パラン方言では語末の *t* が *c* に変わった（落合 2016a: 112–113）。セデック祖語の形式における最終音節の母音は *ə で再建した。これはセデック語パラン方言における化石後方

47　このセデック語トゥルク方言の形式はPecoraro（1977: 24）に*blenax*という表記で見られる。

48　オーストロネシア祖語の形式はBlust and Trussel（2010）から引用した。セデック祖語で期待される反映形は *sapuyなのだが、なぜかsが*h*に変わって*hapuyとなっている。

49　オーストロネシア祖語の形式はBlust and Trussel（2010）から引用した。

50　この接頭辞には名詞を動詞化する機能がある。語根*adupは「狩る」という動詞の他に、「猟場」という名詞として働いたかもしれない。それが後に、セデック語パラン方言では名詞として捉えられるようになり、動詞化するための接頭辞s-を付けたのかもしれない。

51　セデック語パラン方言において歴史的語末子音の*p*が*k*に変わったこと、接尾辞が付くと古い音素*p*で現れることについては落合（2016a: 112–113）が言及している。

接中辞が挿入された形式を基に判断した。前提として、Ochiai（2018: 24 –26）によると、(a) セデック祖語の最終音節における母音 *ə は、トゥルク方言においてもパラン方言においても *u* に変化した、そして(b)セデック語パラン方言ではさらに、次末音節における母音 *ə が *e* に変化する。仮にセデック祖語を *ŋaŋut（トゥルク方言の形式と同一）と再建すると、パラン方言における化石後方接中辞の挿入された形式は *ŋaŋu<ra>t* から語末子音 *t* > *c* の変化、および母音弱化を経て *ŋuŋu<ra>c* になり、そして前次末音節が脱落て *ŋu<ra>c* となるはずである。実際の形式は *ŋe<ra>c* で次末音節の母音が *e* である。上述のようにこれは *ə に遡ることから、早期の形式は *ŋə<ra>c* である。この形式が、セデック祖語における語根の最終音節の母音が *ə であることを示唆するため、*ŋaŋət と再建した。つまり、セデック語パラン方言では *ŋaŋə<ra>t* から *ŋaŋə<ra>c* になり、前次末音節が脱落して *ŋə<ra>c* になり、さらに次末音節の *ə* が *e* に変わって *ŋe<ra>c* になった。

例（4）は、落合（2020a）に詳述されている。セデック語パラン方言の形式に化石後方接中辞の挿入が見られないが、セデック語トゥルク方言の形式に化石後方接中辞 *<ra>* の挿入が見られる。セデック祖語は *ahiŋ と再建されている。トゥルク方言では化石後方接中辞の挿入された *ahi<ra>ŋ* から、前次末音節が脱落して *hi<ra>ŋ* になった。

例（5）は、落合（2016b）に詳述されている。セデック語トゥルク方言には化石後方接中辞 *<na>* の挿入された形式しか見られないが、セデック語パラン方言には化石後方接中辞の挿入が無い形式とある形式の二つが見られる。セデック祖語 * rahut はオーストロネシア祖語 *lahud「下流、海の方向」の反映形である [52]。セデック祖語 * rahut に対し両方言において化石後方接中辞 *<na>* が挿入され *rahu<na>t* となり、さらに前次末音節が脱落して、*hu<na>t* となる。ここからさらにセデック語パラン方言では語末が c に変わって *hu<na>c* となる。セデック語パラン方言では、化石後方接中辞が挿入されなかった形式 *rahut* も残っている。セデック語パラン方言の二つの形式における意味の差異は認められない。

例（6）は、セデック語トゥルク方言とセデック語パラン方言の両方において化石後方接中辞の挿入が無い形式とある形式の二つが見られる。そして両方言において二つの形式には多少の意味の差異が認められる。トゥルク方言において化石後方接中辞の挿入の無い形式 *bərih* は、「戻る、吐く」を意味する語を派生する。Rakaw 他（2006: 142）によると *mətə-bərih* が「（来た道を）戻る」で、*pə-bərih* が「吐く、（体内の消化物を）戻す」である [53]。セデック語パラン方言においても、化石後方接中辞の挿入の無い形式 *berih* は「戻る、吐く」を意味する語を派生する。セデック語パラン方言では *mubu-berih* が「戻る」で、*pu-berih* が「吐く」である。

一方、セデック語トゥルク方言において化石後方接中辞の挿入された形式 *bəri<na>h* は「後退する、遅れて着く」（Pecoraro 1977: 24）を意味する。その形式から前次末音節が脱落した *ri<na>h* も

52　オーストロネシア祖語の形式はBlust and Trussel（2010）から引用した。

53　「吐く」の形式中の接頭辞*pə-*は使役を表すものなので、日本語で「吐く」を意味するところの「戻す」に相当する。

Rakaw 他（2006: 670）に見られるが、意味は「（逆に）かえって…である」となっている。さらに、Pecoraro（1977: 25）には *bəri<na>h* を語基として派生された *tə-bəri<na>h* という形式が挙げられており、意味は「恩知らずな」である。「恩を仇で返す」という日本語の表現法に近いだろうか。化石後方接中辞の挿入の無い形式の意味「戻る、吐く」とは戻る方向に関わる点で意味的共通点が見られるが、意味が異なっている。また、セデック語パラン方言において化石後方接中辞の挿入された形式は、それを語基として派生された *tu-burinah* という形式中に見られ、トゥルク方言の同一形式 *tə-bəri<na>h* と同様に「恩知らずな」という意味である[54]。

３．３　音韻的補足

例（1）から（4）において、化石後方接中辞の形式は *<ra>* であったが、（5）と（6）では *<na>* である。これら化石後方接中辞の選択には音韻的な規則がありそうである。化石後方接中辞として *<na>* を選ぶ（5）と（6）のセデック祖語の形式に注目すると、*rahut と *bərih である。これらに共通するのは子音 *r* を含むことである。*rahut では語頭に、*bərih では語中に *r* がある。化石後方接中辞は本来 *<ra>* であるが、語根が化石後方接中辞の挿入位置（最終音節の母音の直後）よりも前に *r* を持つ場合は、*<ra>* の挿入によって *r* が続くのを避けるために、*r* が異化を起こして *n* に変わった *<na>* を挿入したのではないか。*rahut を例に取れば、*<ra>* が挿入されると *rahu<ra>t* となり *r* が二つ現れるが、これが敬遠されて *rahu<na>t* になり、さらに前次末音節が脱落したということである。

これについて、アタヤル語において化石後方接中辞が挿入された語も検証してみる。例えば、落合（2020a）によると（4）のアタヤル語スコレック方言における同源語は *qəhi<ya>ŋ*「肩」であり、化石後方接中辞として見られる *<ya>* はアタヤル祖語では *<ra> に遡る。アタヤル語において化石前方接中辞 *<ra> が挿入されている他の例として Li（1985: 258）には、「顔」を表す *rəqi<ya>s*（スコレック方言）と *raʔi<ya>s*（ツオレ方言）や（表 1 参照）、「四」を表す *pa<ya>t*（スコレック方言）と *sapa<ya>t*（ツオレ方言）が挙げられている（後者はオーストロネシア祖語 *Səpat の反映形）。これらの例から化石後方接中辞はアタヤル祖語では *<ra> という形式であったと考えられる。

次に、アタヤル語スコレック方言における（6）の同源語を例に、語根に *r* を含む場合を考えてみる。アタヤル語スコレック方言の「戻る」は小川（1931: 382）に *bəzinah*「戻る」とある[55]。これはセデック語の（6）において化石後方接中辞が挿入された形式に相当するため、*bəzi<na>h* と分節される。また、小川（1931: 38）には *bəzih* という形式が見られ、意味は「一方（片方）」である。これは *bəzi<na>h* から化石前方接中辞を除いた、語根の形式であると考えられる。この語根は、アタヤル

54　落合（2016a: 227）においてすでに、セデック祖語の*bəri<na>hは*bərihに由来するのではないかと示唆されている。

55　本稿筆者のフィールドワークによると、アタヤル語においてzで表記される音は[z̪]に近い。

祖語 *bərih と再建され、セデック祖語の形式と意味も考慮するとアタヤル語群祖語に *bərih「戻る」と再建される。アタヤル語スコレック方言の形式中の z［ʐ］については、Li（1981: 264-265）では母音 *i* の前で z として反映される場合が多いとしている。アタヤル祖語の語根において語中に *r を持つ語の場合、セデック語の（5-6）の例と同様に、*<ra> ではなくて *<na>* が挿入されている。アタヤル語ツオレ方言の形式として *pə-bazi<na>h* という形式が得られた[56]。これも、アタヤル語スコレック方言の形式と同じように *<na>* が挿入されている。

このほかに、*<na>* が挿入される例がアタヤル語ツオレ方言に見られた。李（1996: 196）には、アタヤル語ツオレ方言の「汗」の形式として *rinaŋ* が挙げられている。ちなみにアタヤル語スコレック方言の「汗」の形式は *yabux* として挙げられている。これはアタヤル語ツオレ方言の *rinaŋ* とは同源の関係にないと考えられる。アタヤル語ツオレ方言と同源の関係にあると考えられるのがセデック語の形式である。「汗」はセデック語パラン方言では *meriŋ*、セデック語トゥルク方言では *məriŋ* という[57]。これら形式からセデック祖語は *məriŋ と再建される。アタヤル語ツオレ方言の形式は、この *məriŋ に対し、化石後方接中辞として <na> が入り込んだ形式と考えられる。だとすると、アタヤル語群祖の「汗」は *məriŋ と再建できる。恐らくアタヤル語ツオレ方言では *məri<na>ŋ* が作られた後で、前次末音節の *mə* が脱落して *ri<na>ŋ* になったのだろう。この語根も *r* を含む。そのため化石後方接中辞 *<ra>* の挿入によって生じる *r* の連続を敬遠して異化が起き、*<na>* になったのだろう。

表６ではここまでに挙げたアタヤル語の例における化石後方接中辞 *<ya>*（*<ra> からの変化）と *<na>* の分布をそれぞれの方言ごとに示した。分節音の比較を容易にするためにアタヤル語群祖語の形式も付した[58]。

表６　アタヤル語において化石後方接中辞 *<ya>*（*<ra>）または *<na>* が挿入された例

アタヤル語群祖語	アタヤル語スコレック方言	アタヤル語ツオレ方言
*qahiŋ「肩」	*qəhi<ya>ŋ*	---
*daqis「顔」	*rəqi<ya>s*	*raʔi<ya>s*
*səpat「四」	*pa<ya>t*	*sapa<ya>t*
*bərih「戻る」	*bəzi<na>h*	*pə-bazi<na>h*
*məriŋ「汗」	---	*ri<na>ŋ*

56　アタヤル語ツオレ方言の形式はLi（1981: 290）から引用したが、化石後方接中辞の分節は本稿筆者が加えた。Liは同形式のアタヤル語群祖語を*ma-bəri-nahと再建している。この分節では*bəri*が語根、*-nah*を接尾辞として扱っているが、これは誤りである。

57　セデック語トゥルク方言の形式はRakaw他（2006: 468）から引用した。

58　Li（1996）のアタヤル語ツオレ方言の変種のデータにおいて、*<ra>でも*<na>*でもない化石後方接中辞の形式が見られたが、本稿では例外と見なし扱わない。別稿で議論したい。

化石後方接中辞に *<na>* を持つのは「戻る」と「汗」を表す語であるが､それぞれの形式について、アタヤル語群祖語の語根の形式を見ると、語中に *r を含んでいる。そのためセデック語と同様に、語根において語頭または語中に *r を含む場合、化石後方接中辞は *<ra>* ではなくて *<na>* になるようである。このように、*<na>* の出現には音韻的な制限がある[59]。

ただし、アタヤル語ツオレ方言の変種の中には *<na>* を過剰に適用した例も見られた。「顔」を表すアタヤル語群祖語の語根の *daqis は語頭子音または語中子音に *r* を持たないため、本来なら表１にあるように化石後方接中辞として *<ra> が挿入されることが期待されるが、Li（1985: 258）ではシキクン集落（Skikun）の形式が *rəqi<na>s*、マリナハ集落の形式が *raqi<na>s* である。これらの集落では *<ra> の音韻的条件下で見られる変位形としての <na> が、*<ra> の自由交替形と考えられるようになり、音韻的条件に反しているのにも関わらず <na> が挿入されるようになったのだろうか。可能性として考えられるのが、アタヤル祖語 *daqi<ra>s にある語頭の *d がアタヤル語で *r* に変化し *raqi<ra>s になった後に、アタヤル語ツオレ方言の変種のいくつかでは *r* の連続を避けるために化石後方接中辞 *<ra>* の子音 *r* が *n* に変わり、*<na>* になったのかもしれない[60]。

３．４　化石後方接中辞の再建

表７では３．３節における化石後方接中辞の形式についての議論をまとめ、アタヤル語群祖語の形式を再建する。

表７　セデック祖語・アタヤル祖語・アタヤル語群祖語の化石後方接中辞

セデック祖語	*<ra>
セデック語パラン方言	*<ra>*/*<na>*
セデック語トゥルク方言	*<ra>*/*<na>*
アタヤル祖語	*<ra>
アタヤル語スコレック方言	*<ya>*/*<na>*
アタヤル語ツオレ方言	*<ya>*/*<na>*
アタヤル語群祖語[57]	*<ra>

化石後方接中辞として、セデック語の両方言には *<ra>* と *<na>* の二つの形式が見られた。このうち *<na>* は、語根における語頭子音または語中子音が *r* である場合に、*<ra>* の挿入によって生じる *r* の連続を避けるために、異化が起きたものである。そのため、*<ra> がセデック祖語として再

59　異化が起きた化石後方接中辞*<na>*が挿入されていると特定された語について、異化を引き起こす子音*r*は語末以外の位置で現れていた。語末に*r*がある場合でも同様の異化が起きて*<na>*が挿入されるかどうかは明らかでない。

60　この音韻的説明の可能性については査読者のお一人からご指摘を受けた。

61　Li（1982: 299）もアタヤル語群祖語の形式を*<ra>と再建している。ただし、この再建形はアタヤル語のデータのみを基に作られている。本稿ではセデック語のデータを加えたことでアタヤル語群祖の再建形をより正確なものとした。

建される。アタヤル語も同様で、化石後方接中辞として、アタヤル語の両方言には *<ya>* と *<na>* の二つの形式が見られた。*<ya>* は *<ra> が変化したものである。このうち *<na>* は、語根における語頭子音または語中子音が *r* である場合に、**<ra>* の挿入によって生じる *r* の連続を避けるために異化が起き、*<ra> の代わりとして挿入される。そのため、アタヤル祖語の形式としても *<ra> が再建される。化石後方接中辞として、セデック祖語の *<ra> とアタヤル祖語の *<ra> から再建されるアタヤル語群祖語の形式は *<ra> となる。

３．５　他言語との比較

３．５．１　他の台湾オーストロネシア諸語との比較

アタヤル語群において化石後方接中辞が挿入される位置は最終音節の母音の直後である。この位置に接中辞が挿入されるのは、オーストロネシア語族の中でアタヤル語群に限られているわけではない。Yu（2003）には、最終音節の母音の直後に接中辞が挿入される言語とその例が挙げられているが、その中に台湾オーストロネシア諸語のパイワン語、アミ語、サオ語が含まれている。パイワン語、アミ語、サオ語から三例ずつ表８に、語根とそれに対し後方接中辞に類似する位置に分節音が挿入された形式を挙げた[62]。

表８　パイワン語、アミ語、サオ語における後方接中辞の例

	語根	後方接中辞の挿入された形式
パイワン語	*kuva*「豆」	*kuva<kuva>*「水疱瘡」
	kadʒay「小さなかご」	*kadʒa<kadʒa>y*「とても小さなかご」
	ɭuʔul「棺」	*ɭuʔu<ɭuʔu>l*「小さな箱」
アミ語	*luma?*「家」	*luma<luma>?*「家々」
	wiɬaŋ「友」	*wiɬa<wiɬa>ŋ*「友たち」
	tamɬaw「人」	*tamɬa<mɬa>w*「人々」
サオ語	*kikaɬi*「尋ねる」	*ma- kikaɬi<kaɬi>*「訪ねて回る」
	m-armuz「飛び込む」	*m-armu<rmu>z*「繰り返し飛び込む」
	quliuʃ「長い」	*quliu<liu>ʃ*「まっすぐにする、伸ばす」

アタヤル語群とパイワン語などの接中辞では異なる点が二つある。まずは機能面である。アタヤル語群における化石後方接中辞の機能が不明であるのに対し、パイワン語ではサイズの縮小や意味的転化（陳・馬 1986: 37）、アミ語では複数性（何他 1986: 30–31）、サオ語では動作の反復（Chang 1998: 279 –280）などを表す機能がある。次に化石後方接中の形成方法についてである。アタヤル語群は *<ra> という決まった形式を持つのに対し、パイワン語、アミ語、サオ語は語根の一部を

62　パイワン語の形式は（陳・馬1986: 37）から、アミ語の形式は（何他1986: 30–31）から、サオ語の形式は（Chang 1998: 284, 290–291）からの引用である。Yu（2003）はこれらの言語における語例の重複部分を最終音節の母音の直後に挿入される接中辞と見なしている。

重複させる。次に、音節構造についてであるが、後方接中辞はアタヤル語群では <CV> という音節構造であるのに対し、パイワン語では <CVCV>、アミ語では <CVCV> と <CCV>、サオ語では <CVCV>、<CCV>、<CVC>、<CVV> であり、いずれもアタヤル語群の <CV> よりも分節音が多い。さらに、アタヤル語群において語末子音を持たない語に後方接中辞の *<ra> が挿入される例は見られない。これに対し、パイワン語、アミ語、サオ語では語末子音を持たない語においても、後方接中辞が見られる。この場合は、一見すると接中辞ではなくて接尾辞のようにも見える。

さらに、アタヤル語群の化石後方接中辞 *<ra> の生産性について見ると、現在では生産性がない。アタヤル語群では限られた語にのみ *<ra> が挿入されている。どの語に挿入されるかも恣意的であり、規則性が見いだせない。これらの語に *<ra> が挿入されているという事実も、本稿のようにセデック語の方言間での同源語の比較や、セデック語とアタヤル語間での同源語の比較や、オーストロネシア祖語との同源語の比較という過程を経て明らかになるものである。アタヤル語群における *<ra> の挿入という音韻変化は、ある時期に適用されたと考えるが、その時期以降は廃れたらしい。現代のアタヤル語またはセデック語において *<ra> が挿入される音韻変化は観察されない。それに対し、パイワン語、アミ語、サオ語における後方接中辞は、その機能が明確、その機能を表すにふさわしい語ならば後方接中辞を挿入することは可能だろう。そのためある程度の生産性があると言える。

表９　台湾オーストロネシア諸語における後方接中辞の性質の分類

	アタヤル語群	パイワン語	アミ語	サオ語
機能	不明	縮小など	複数	反復など
形成方法	*<ra>	重複	重複	重複
音節構造	<CV>	<CVCV>	<CVCV>, <CCV>	<CVCV>, <CCV>, <CVV>
語末子音	あり	あり / なし	あり / なし	あり / なし
生産性	低い	高い	高い	高い [63]

３．５．２ アタヤル語群の後方接中辞の機能―隠語を造る

表９からわかるようにアタヤル語群の後方接中辞は、パイワン語、アミ語、サオ語などほかの台湾オーストロネシア諸語とは性質を異にする。最も不可解なのはその機能が不明である点である。確実なことはわからないが、もしかしたらアタヤル語群の後方接中辞には隠語を造る機能があったのかもしれない [64]。

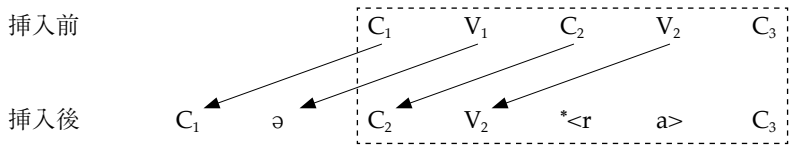
アタヤル語群の音韻的特徴として挙げられるは、次末音節よりも前の母音が弱化することである。

63　Chang（1998: 279）によると、サオ語においてこのタイプの重複による派生はproductiveである。

64　筆者が2018年（謝辞で言及している）にセデック語における後方接中辞について発表した際に、Robert Blust氏はその機能としてspeech disguiseの可能性を示唆した。

次末音節と最終音節のみ、本来持っている母音を保つことができる。化石後方接中辞 *<ra> の場合、最終音節の母音の直後に挿入されるため、最終音節の母音とその直前にある子音を一つ前の音節である次末音節へと押しやり、次末音節の母音を前次末音節へと押しやることになる。前次末音節は母音が弱化する音節であるから、本来の母音は保たれない。その上、前次末音節自体が脱落する場合が多い（３．３節にあるアタヤル語スコレック方言の *pa<ya>t*「四」、３．２節にあるセデック語パラン方言の *hu<na>c*「下り坂」など）。この場合、本来の次末音節の分節音が失われることになる。また、最終音節は *<ra> と本来の最終音節におけるコーダから成るものなる。次末音節と最終音節ともに、最終音節におけるコーダを除き本来の分節音を留めない。語根に与える分節音の変化の大きさは極めて大きいと言える。化石後方接中辞の挿入により、語根はほぼ原形を留めないことになる。これを図１に図式化した。典型的な語根である $C_1V_1C_2V_2C_3$ という音節構造を例として用いる。

図１　アタヤル語群における化石後方接中辞の挿入の図式



アタヤル語群において次末音節と最終音節は母音が弱化を受けないため音声的に重要である。これらの音節を四角で囲った。この部分を見るとわかるように化石後方接中辞の挿入後に語根の分節音の位置と音が保たれているのは、語末子音 C_3 のみである。

化石後方接中辞の挿入は大きな変化を引き起こし、語根がほぼ原形を留めなくなる。原形がわからなくなるという点に着目すると、化石後方接中辞の挿入はある語の禁忌を回避するなどために、その語に音韻的変形をほどこし、それを隠語として用いたと考えられないだろうか。佐山（1920: 160）は、アタヤル語において「他者ニ知ラルルヲ忌ム時ニハ隠語…ヲ用フ」とある。例えば *patus*（鉄砲）という語が禁忌である場合、代わりに *tutuh*（煙管）を用いるそうである[65]。このような言葉の置き換えとは別に、化石後方接中辞 *<ra> の挿入により、ある語をそれとはわからなくさせるような偽装効果があったのではないか。

さらにアタヤル語からの情報を加えると、Li（1982）はアタヤル語ツオレ支族に属するマリナハ集落では、男性と女性で単語の形式が異なる場合があると報告している。形式を保存しているのは

65　佐山（1920）においてアタヤル語の形式はカタカナで表記されているが、小川（1931: 99, 251）の語彙集を参考にローマ字表記に直した。ちなみに、筆者はセデック語においても、このように禁忌の対照となる語を別の語で置き換えることをしていたと聞いたことがある（例えば「太陽」を指す際に「砂」と言ったらしい）。また言葉の使用に禁忌があるのは、山へ狩りに行く際などに超自然、神霊などに対して敬意を払い、禁忌の語を発することで悪いことが起きるのを避けるためだとする。このことを鑑みれば禁忌が適応される語は、「太陽」など自然環境や気象に関連した語が多かったのではないかと推察される。ただし現代のセデック族の生活において、言葉の禁忌の文化はすでに廃れているといえる。

女性が用いる語の方であり、形式を改新したのは男性が用いる語の方である。男性が改新に用いる主要な方法は、本稿で議論した化石接中辞 *<ra> の挿入や、化石接尾辞の付加による変形である。Blust（2013: 143）はマリナハ集落に見られる化石中央接中辞と化石後方接中辞の添加による改新について、その機能は隠語を造ることであったろうと述べている。

Blust（2013: 143–149）はオーストロネシア語族における隠語について述べている。ブル語ではある領域内において言葉の禁忌が見られるそうである。例えば、*menjaŋan*「鹿（マレー語からの借用形）」と言ってはいけない場合に、*wadun*「首の後ろ」という語で言い換えるそうである[66]。このような語の置き換えは上述のようにアタヤル語でも行われる。さらに、タガログ語やジャカルタの若年層が話すインドネシア語では音韻的変形を用いて隠語を造るそうである。タガログ語では、例えば *sí:lo?*「罠」に対し、接中辞を挿入して *s<ig>i:-l<o:g>o?* というように変形する。接中辞は各音節のオンセット直後に挿入される[67]。また、ジャカルタの若年層が話すインドネシア語では、例えば *cəlana*「ズボン」に対し接中辞を挿入して *cəl<ok>an* というように変形する。接中辞は次末音節の母音の直前に挿入され、語末の母音は脱落する[68]。タガログ語やインドネシア語における接中辞の挿入による音韻的変形は、アタヤル語群における化石後方接中辞の挿入による音韻的変形に通じるところがある。アタヤル語群においても化石後方接中辞の挿入によって隠語を造る作用があったのではないか。

4．おわりに

セデック語パラン方言とセデック語トゥルク方言の同源語を比較することで、どちらか一方の方言に化石前方接中辞または化石後方接中辞が挿入されている語を特定した。これらセデック語における化石前方接中辞の形式と、これまでに記述されているアタヤル語における化石前方接中辞の形式を比較することにより、アタヤル語群の化石前方接中辞について *<əl>、*<ən>、*<əR> の三つの形式を再建した。

また、本稿で特定したセデック語における化石後方接中辞の形式と、これまでに記述されているアタヤル語における化石後方接中辞の形式を比較することにより、アタヤル語群の化石後方接中辞を *<ra> と再建した。語根に *r が含まれている場合には異化が起き、セデック語とアタヤル語ともに *<na>* という形式で現れる。

化石前方接中辞の機能については、本稿で取り上げたセデック語の語例において少数の語で意味

66　Blust（2013: 147–148）におけるブル語の記述はGrimes and Maryott（1994）に拠る。

67　Blust（2013: 145–147）におけるタガログ語のデータはConklin（1956）からの引用である。

68　Blust（2013: 145–147）におけるジャカルタの若年層が話すインドネシア語のデータはDreyfuss（1983）からの引用であるが、データの音韻的分析はBlust（2013）による。

的違いが見られることもあるが規則性が見いだせない。また、Li and Tsuchida（2009）で取り上げられたアタヤル語の語例においても化石前方接中辞の機能は不明である。Blust（2013）はオーストロネシア祖語の *<ar> は複数性を表したと述べている。このことに関連して、19 世紀後半に記録されたアタヤル語の最早期の語彙集（Guérin 1868）において、化石前方接中辞の挿入された語が複数性を表していると考えられる例が一例だけ見られた。もしかしたら、アタヤル語群でも早い時期には化石前方接中辞が複数性を表していたのかもしれない。

化石後方接中辞の機能については、この接中辞の挿入が比較的生産的に行われていた時代において、隠語を造る働きがあったと考えられる。例えば、アタヤル語マリナハ集落では男女で形式が異なる場合があり、男性の用いる形式は接中辞や接尾辞を挿入した改新的なものであるが（Li 1982）、Blust（2013）は男性の用いる形式にみられる音韻的変形は隠語を造るためのものではなかったかと述べている。セデック語やアタヤル語において音声的に重要な音節は次末音節と最終音節である。それ以前の音節は母音弱化を被り、本来の母音が失われるためである。化石後方接中辞 *<ra> の挿入は、次末音節と最終音節の分節音に大きな変化をもたらし、ほぼ語根の原形を留めない。本来の語が何であったか分からなくなるため、隠語として機能することができたのではないか。

参考文献

Blust, Robert and Stephen Trussel (2010) *Austronesian Comparative Dictionary, Web Edition.* http://www.trussel2.com/ACD/［2021 年 8 月アクセス］.

Blust, Robert (2013) *The Austronesian languages.* Canberra: Australian National University, Research School of Pacific and Asian Studies.

Bullock, Thomas L. (1874) Formosan dialects and their connection with the Malay. *China Review, or Notes and Queries on the Far East* 3: 38–46.

Chang, M. Laura. 1998. Thao reduplication. *Oceanic Linguistics* 37(2): 277–297.

陳康・馬榮（1986）《高山族語言簡志（排灣語）》. 北京 : 民族出版社 .

Conklin, Harold C. (1956) Tagalog speech disguise. *Language* 32(1): 136–139.

Dreyfuss, Jeff (1983) The backwards language of Jakarta youth: A bird of many language feathers. In James T. Collins (eds.), *Studies in Malay Dialects Part 1, NUSA 16*, 52–56. Jakarta: Universitas Atma Jaya.

Egerod, Søren (1980) *Atayal-English dictionary, vol. 1*. London: Curzon.

Ferrell, Raleigh (1970) The Pazeh-Kahabu language. *Bulletin of the Department of Archaeology and Anthropology* 31/32: 73–96.

原住民族委員会（2013）原住民族語 E 楽園 http://web.klokah.tw［2020 年 6 月アクセス］.

Grimes, Charles E., and Kenneth R. Maryott (1994) Named Speech Registers in Austronesian Languages. In Tom Dutton and Darrell T. Tryon (eds.), *Language Contact and Change in the Austronesian World*, 275–319. Berlin: Mouton de Gruyter.

Guérin, M. (1868) *Du dialecte Tayal ou aborigène de l'ile Formose*. Bulletin de la Société de Geographie 16: 166–495.

Huang, Hui-chuan J. (2018) The Nature of Pretonic Weak Vowels in Squliq Atayal. *Oceanic Linguistics* 57(2): 265–288.

何汝芬・曾思奇・田中山・林登仙（1986）《高山族語言簡志（阿眉斯語）》. 北京 : 民族出版社 .

Li, Paul Jen-kuei (1978) A comparative vocabulary of Saisiyat dialects. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 49: 133–199.

———————— (1982) Male and female forms of speech in the Atayalic group. Bulletin of Institute of History and Philology 53(2): 265–304.

———————— (1985) The position of Atayal in the Austronesian family. In Andrew Pawley and Lois Carrington (eds.) *Austronesian linguistics at the 15th pacific science congress*, 257–280. Canberra: Pacific Linguistics.

李壬癸（1996）『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭 : 宜蘭縣政府 .

Li, Paul Jen-kuei and Shigeru Tsuchida (2009) Yet more Proto Austronesian infixes. In Bethwyn Evans (eds.) *Discovering history through language: papers in honour of Malcolm Ross*, 345–362. Honolulu: University of Hawaii Press.

落合いずみ（2016a）『セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究』京都大学博士論文 .

————————（2016b）「傾斜を軸とするセデック語パラン方言の民俗方位」『神戸市外国語大学アジア言語論叢』10: 25–47.

————————（2016）Bu-hwan vocabulary recorded in 1874: Comparison with Seediq dialects. *Asian and African Languages and Linguistics* 10: 287–324.

————————（2018）Historical reduplication in Seediq. *Kyoto University Linguistic Research* 37: 23–40.

————————（2019a）Formosan "leaf" : A reconstruction. *The Kobe Gaidai ronso* 71(1): 135–152.

————————（2020a）「アタヤル語群における「肩」の再建」『アジア・アフリカ言語文化研究』100: 141–153.

————————（2020b）アタヤル語群の文化的語彙 *Ratəd を再建するまで『島嶼地域科学』1:　59–73.

————————（2021）「アタヤル語の「サトウキビ」に起きた特異な音韻変化」2021 年度海外学術調査フェスタ , 口頭発表 , 2021 年 6 月 20 日 , 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（オンライン）.

小川尚義（1931）『アタヤル語集』台北 : 台湾総督府.

小川尚義・浅井恵倫（1935）『原語による台湾高砂族伝説集』台北 : 台北帝国大学言語学研究室 .

Pecoraro, Ferdinando (1977) *Essai de Dictionnaire Taroko-Français*. Paris: Société pour l' Etude et la Connaissance du Monde Insulindien.

Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編（2006）『太魯閣族語簡易字典』秀林鄉 : 秀林鄉公所 .

Ross, Malcolm (2015) Some Proto Austronesian coronals reexamined. In Zeitoun, Elizabeth, Stacy Fang-Ching Teng, and Joy J. Wu (eds.), *New advances in Formosan linguistics*, 1–38. Canberra: Asia-Pacific Linguistics.

佐山融吉（1920）『蕃族調査報告書：大么族後編』台北 : 臺灣総督府蕃族調査会 .

月田尚美（2009）『セデック語（台湾）の文法』東京大学博士論文.

Viray, Felizberto B. (1973) [1939]. The infixes la, li, lo and al in Philippine languages. In A.B. Gonzalez, T. Llamzon and F. Otanes (eds.), *Readings in Philippine linguistics*, 486–499. Manila: Linguistic Society of the Philippines.

Yu, Alan Chi Lun (2003) The morphology and phonology of infixation. Doctoral dissertation. University of California, Berkeley.

（2021 年 9 月 3 日受付、2022 年 1 月 13 日審査終了）

Fossilized infixes in Seediq
Identification through dialect comparison

Izumi OCHIAI*

ABSTRACT

This study compares two dialects of Seediq (Atayalic, Austronesian), Paran Seediq and Truku Seediq, and identifies fossilized infixes in their cognates. Each of the cognates discussed in this paper displays a fossilized infix in, either Paran Seediq or Truku Seediq, or both. Fossilized infixes are categorized into three types: a fossilized front infix which is inserted after the initial consonant, a fossilized central infix which is inserted after the middle consonant, and a fossilized back infix which is inserted after the final vowel. This paper deals with the fossilized infixes seen in Seediq; that is, fossilized front and fossilized back infixes. Through a comparison with fossilized infixes in Atayal (Atayalic, Austronesian), the fossilized front infix is reconstructed in Proto-Atayalic as *<əl>, *<ən>, or *<əR>. The fossilized front infix is widely observed in Austronesian languages. This paper demonstrates that it is usually inserted into reduplicated stems; however, Atayalic is peculiar in that the fossilized front infix is rarely inserted into reduplicated stems. On the other hand, the fossilized back infix is only seen in the Atayalic languages. Their function is uncertain; however, they could have been used to create a secret language as infixation causes a radical phonological change to the extent that the original word can not be retrieved. Through a comparison of the fossilized back infixes in Seediq and those in Atayal, the fossilized back infix in Proto-Atayalic is reconstructed as *<ra>.

Keywords: Seediq, Atayal, secret language, fossilized infixes, reconstruction

* Department of Human Sciences, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine